春風秋霜 1月号

平成２７年１月５日
島田市教育委員会だより
教育長　濱田和彦

春風を持って人に接し、秋霜をもって自らを慎む　　佐藤一斎

1　新年を迎えて

明けましておめでとうございます。昨年は、教職員の皆様の努力により、学校の安定感が増し、全国学力学習状況調査の結果も、確実な取り組みの成果を見ることができました。教職員の皆様のご努力に心から感謝申し上げます。

これから本年度もまとめの時期となります。３月の年度末を目指し、1 年間のまとめをすると共に、次年度に向けた確実な準備をお願いします。

2　平成 27 年度　教育方針について

12 月の定例教育委員会で来年度の教育方針が決まりました。この方針に沿って学校教育課の方針が提案されます。各学校においては、これらの方針に込めた思いを酌んだ取り組みをお願いいたします。

本年度、教育委員が学校訪問をすると、チーム〇〇校という言葉をよく耳にしました。これは、学校の教育方針を全職員がしっかり理解し、学校がチームとして一つの方向を目指して活動しているということです。学校が同じ方向を向いて活動を始めると、変化が形として見えるようになります。チームとして機能している学校は、授業改善も見える形で進んでいました。

各学校の教育課程の編成作業は、教育目標や重点目標を全職員で共有する作業です。十分に話し合い、全職員がチームとして動く学校づくりをお願いします。

3　南相馬市を訪問して

12 月 6 日（土）7 日（日）、招待されたマラソン大会に参加するため、福島県南相馬市を小・中学生 8 人と共に訪問しました。マラソン大会では、上位入賞者を 3 人も出すすばらしい結果を収めることができました。

南相馬市を取り巻く復旧の状況は、1 年前の訪問時と比べると着実に進んでいました。除染が進んだ常磐自動車道は、通行可能区間が広がり、東からは南相馬市まで入ることができるようになり、海岸近くを走る国道 6 号線は、放射能汚染の高い浪江町や大熊町が車のみ全線通行可能（バイク・自転車は通行不可）になっていました。南相馬市長の「道路網の復旧は、物資確保の道というだけでなく、命をつなぐ道です」という言葉に、道路の復旧が地元住民の悲願であったことが分かります。

汚染物質の入った袋（大熊町）

昨年見学した南相馬市の津波被害地では、海岸線の堤防や県道は手付かずのままながら、水田が復元されているところも見られました。しかし、国道 6 号線を走ると、大熊町では白い防護服を着た作業員が水田の除染作業を行っていました。２m以上もある草木が刈り取られて 1.5m近いロール状になっていたり、剥ぎ取った表土を入れる大きな黒いビニル袋がたくさん並べられたりしていました。浪江町では作業が進まず、原野のようになった水田もたくさん見られ、すべての作業が終了し、住民が帰還できるようになるには、大きな労力と時間がかかると思いました。

原野になった水田（浪江町）

東日本の大震災も 3 年の年月が経つと、次第に記憶が薄れてしまいます。しかし、現

場に立つと、厳しい現実を目の当たりにします。直接的な支援ができなくても、教師の責任として子どもたちに現状を伝えていかなくてはならないと思います。冬季休業中には多くの校長が石巻市を訪問し、現状を視察してきました。その情報がすべての学校に広がることを期待しています。

４　いじめ防止について

島田市では、いじめ防止標語　電柱看板設置を進めています。12 月 8 日現在、市内には 18 枚の看板が設置されています。以前にもお願いしましたが、設置された看板を子どもたちに紹介すると共に、地域へも発信していただきたいと思います。

いじめ防止は、いじめについて意識する機会が多いほど、その効果は大きいと思います。そのためには、看板を話題にしたり、いじめについて話し合ったりする機会を、家庭や地域の中で増やさなくてはなりません。

校内でいじめが疑われることがあったら、しっかり調査し情報の共有を行ってほしいと思います。中途半端な調査では、隠蔽を疑われたり、最善の対策に結びつかなかったりします。また、情報を全職員で共有しないと、対応に穴が生じる心配があります。小さな事件でも調査と情報の共有を徹底していただきたいと思います。

５　島田市立図書館と静岡福祉大学との相互協力協定について

12 月 24 日に島田市図書館と静岡福祉大学の間で、図書の相互貸借、行事の共同開催等における相互協力の協定を結びました。このことにより、福祉大学所蔵の障害者用布の絵本や点字絵本、大活字本、音訳資料の活用ができるようになり、島田図書館の障害者用図書が大幅に充実します。

障害者用の絵本は、障害者だけでなく幼児をはじめ多くの市民が楽しめるものだと思います。2 月 10 日（火）から企画展が開催されるので、手にとって見てほしいと思います。

障害者用図書の前での調印式

肘かけ椅子

服部　正美　　学校教育課長

子ども時代の原風景

「最近の子どもは･･･」と言うことがあります。それは、その人の子どものころの原風景と比べて、発している言葉です。どんな原風景があるのでしょうか。

私の場合、原っぱで友だちと遊んでいる風景、ドッジボールやソフトボールをしている風景、その中で言い争いをしたり失敗をしたりした風景があります。遊びの中で、ルールを守ること、協力することを学びました。自分たちで計画し、活動する面白さも味わいました。その風景には、常に人や自然がありました。

今は、ゲーム機やスマートホンなどがありますから、そこに人がいなくても遊ぶことはできます。この世界は、疑似の世界であり、相手を意識しないで自分の意のままに動かせる体験になりがちのように思います。これが、子ども時代の原風景になってしまわないかと心配しています。

子どもの心に、どんな原風景を残してあげることがいいのでしょうか。自然の中で五感を働かせる体験、節目節目にある日本の文化伝統を味わうこと、人と人とが交わる体験などが考えられます。「世の中は、面白いよ」そんなことを子どもに語り、それが実感できる活動をともにできるといいと思います。私たち大人が豊かになることで、子どもも豊かになっていきます。

大人として、親として、子どもに知性を高めるプレゼント、心を豊かにする原風景のプレゼントをしていきたいと思っています。